

チームビルディング手法を用いた 保育内容「人間関係」における授業実践

A classroom practice of team building method in contents of childcare (Human Relations)

仁科 伍浩・福永 知久

Kumihiro Nishina, Tomohisa Fukunaga

はじめに

2017（平成29）年に保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂（定）・告示された。その中で、生涯にわたる生きる力の基礎を培うため、保育の目標や幼稚園教育の基本を踏まえ、育みたい資質・能力を一体的に育むように努めることが示された。これにより、子どもにふさわしい資質・能力を育むことにより、幼児教育と小学校以上の教育との接続が確実のものとなる¹⁾ことが期待されている。また、保育のねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して育む具体的な姿として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記された。これは、子どもがそれぞれの保育の場での生活を終えるまでに「育ってほしい姿」として10項目が示された²⁾。

さらに、今回の改定の中で、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、乳児保育に関わるねらい及び内容として、「健やかに伸び伸び育つ」、「身近な人と気持ちが通じ合う」、「身近なものと関わり感性が育つ」の3つの視点が示された。また、1歳以上3才未満児及び3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容については、保育内容5領域が置かれ、3歳以上児のねらい及び内容は、幼稚園教育要領と共通の規定となった。こうした改訂（定）の中で、開³⁾は、養護及び乳児保育に関わる「ねらい及び内容」の3視点と1歳以上3歳未満児及び3歳以上児に関わる「ねらい及び内容」の5領域の繋がり、5領域と幼児期の終わりまでに育てほしい姿の繋がり、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と小学校各教科の繋がりをもとに、整理し図式化している（図1）。乳児保育に関わるねらい及び内容については、生活や遊びが充実することを通して、子どもたちの身体的・精神的・社会的発達の基盤を培うという基本的な考え方を踏まえ、例えば「身近な人と気持ちが通じ合う」であれば、「人間関係」や「言葉」の領域に繋がっている。これら3つの視点や領域はそれぞれに独立してあるのではなく、複雑に絡まり合い、重なり合っている⁴⁾といえる。

なお、5領域に分けて示されている1歳以上3歳未満児及び3歳以上児であっても、それぞれの時期の発達の様子をもとにしているため、ねらいと内容、内容の取扱いの記載内容は異なっている。

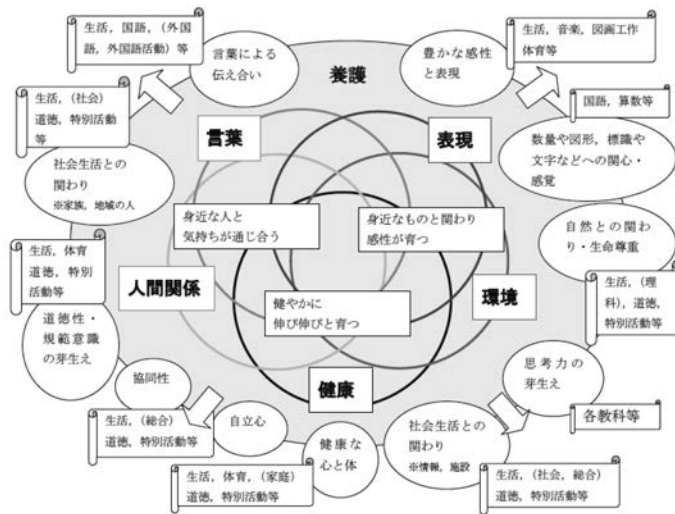


図1 乳児期から幼児期さらに小学校以降の児童期へのつながりを見通す概念図（開、2018）

幼稚園教育要領及び保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領3歳以上児の保育内容「人間関係」の項目を見ていくと、「ねらい」には、「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」と記されている。また、内容の取扱いにおいては、「試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力でやることの充実感を味わう…」、「協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるとともに、他の子ども（園児）と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わう…」といった記述がみられる。こうした、「協力」や「工夫」、「一緒に活動」といった言葉は今回の改訂（定）から新たに追加されたものであり、人間関係の領域において求められる保育の在り方が示されていると考えられる。特に、協同して遊ぶことについては、友達と目的を共有化し、その具現化に向け試み、繰り返し工夫して取り組み、達成感や満足感を共有するという学びのプロセスを身に付けていく⁵⁾ことが望まれる。

また、近年では幼児期の教育の効果として非認知能力（社会情動的スキル）の発達が注目されている。非認知能力とは、肉体的・精神的健康や、根気強さ、注意深さ、意欲、自信といった社会的・情動的な性質などのことであり、日本における幼児教育が重視する、心情・意欲・態度と重なる部分であるとされる。幼児教育において非認知能力が高まることにより、認知能力も相乗的に高まり、その後の人生における収入を始めとした社会的・経済的成功に影響をもたらすことが示されている^{6) 7)} (図2)。そして、人間関係の中で獲得される非認知能力は、「(a) 一貫した思考・感情・行

動のパターンに発現し、(b) 学校教育またはインフォーマルな学習によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」と定義することができる⁸⁾。これらのスキルは、目標を達成する力（例：忍耐力、意欲、自己制御、自己効力感）、他者と協働する力（例：社会的スキル、協調性、信頼、共感）、そして情動を制御する力（例：自尊心、自信、内在化・外在化問題行動のリスクの低さ）を含んでいる⁸⁾とされる。

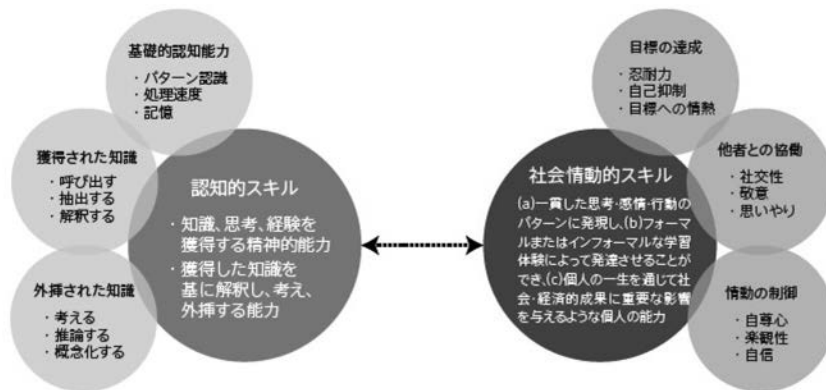


図2 認知的スキル、社会情動的スキルのフレームワーク
(OECD, 2015／池迫・宮本, 2015)

こうした改訂（定）や非認知能力の重要性を受けて、保育内容「人間関係」の指導法について各保育者養成校の授業内容を比較・検討した渡辺⁹⁾によると、どの養成校もテキストは現場型の実践的なものを使用し、内容も実践に繋がるものが多くみられたとされる。

また、青山¹⁰⁾は、アクティブラーニングを取り入れた指導法の必要性や保育の環境構成を学ぶことの重要性を示している。これらのことから、保育内容「人間関係」の指導法においては、学生が実践に必要な技術とそれに裏付けされる知識とを関連させて身に付けられる授業内容を検討していくことや、学生の視点に立った主体的・対話的な活動を生む授業構成と教材の工夫が重要である¹¹⁾と言える。

本論では、こうした保育内容「人間関係」のねらいや内容と保育者養成校に求められる授業内容を考慮した上で、筆者がこどもの指導法「人間関係」及び人間関係論の講義内で行ったチームビルディング手法を用いた協同型授業についての実践報告及び一考察を述べる。なお、チームビルディングとは、近年保育・教育施設だけでなく企業等での研修で実施されており、チームメンバーの多様性を発揮しつつ、相互に関わり合いながら設定したゴールに向かって進むチーム作りのことであり¹²⁾、今回はその一手法を用いた。また、協同型授業とは、野崎¹³⁾が示した「グループになって友達同士で教え合ったり、話し合ったりする授業」に、保育内容「人間関係」のねらいや内容を踏まえて「グループ内で工夫や試行錯誤を繰り返しながら、目標の達成に向かって活動を進める授業」

という視点を新たに加えて定義し、授業実践の際にはこうした視点を重視した。

授業内容と実践の概要

実施時期と対象者

日本工学院八王子専門学校こども学科において、2019年10月～12月及び、2020年10月～12月にそれぞれ計8回ずつ行った、こどもの指導法「人間関係」及び人間関係論の講義内における実践を本研究の報告・分析対象とした。この際、本学の履修システム上、両方の講義を受講した学生と人間関係論のみを受講する学生が存在した。なお、両授業ともに開講学年及び時期は1学年後期であった。

授業内容と到達目標

こどもの指導法「人間関係」及び人間関係論の授業概要と到達目標を表1にまとめた。両科目の授業概要や到達目標を踏まえて、人間関係論は、保育内容「人間関係」の概要や理論について学ぶ

表1 こどもの指導法「人間関係」及び人間関係論の授業概要と到達目標

	こどもの指導法「人間関係」	人間関係論
授業概要	①遊びや活動を体験する中で、友達や保育者、保護者など子どもを取り巻く様々な人々との人間関係の発達について考える。 ②近年の社会的背景を踏まえたうえで、子どもの「人間関係」の育成における園や施設の役割を理解する。 ③保育における指導計画の意義を理解し、自ら立案した計画をもとに模擬保育を通して実践する。	①保育所保育指針を参考に保育内容「人間関係」について基本的な理解を深める。 ②子どもを取り巻く社会的背景を理解したうえで、「乳児期の人間関係」、「1歳以上3歳未満児の人間関係」、「3歳以上児の人間関係」、「自己理解・他者理解」の大きく4つに分け、事例やワークを通して実際の場面をイメージしながら学べるよう進めていく。 ③保育者として様々な人間関係において良好な関係が築いていけるように基礎を学んでいく。
到達目標	①子どもが他者との人間関係を形成していくために必要な保育者の援助について理解し指導計画を立案できる。 ②子どもの発達段階を踏まえた人間関係のあり方について理解し説明できる。 ③人間関係を育むような保育展開になる指導計画を立案し、実践・評価・改善を行うことができる。 ④子どもたちが遊びや生活の中で「人とかかわる力」をどのように身につけていくのかを理解し、「人とかかわる力」を育むための援助をすることができる。	①保育所保育指針における保育内容「人間関係」のねらいや内容、内容の取扱いについて説明することができる。 ②事例やワークを通して、実際の場面をイメージし、グループワーク等で作業課題に取り組む際、学生自身が調べ、ディスカッションにより意見を自分の言葉で表現することができる。 ③社会背景を理解したうえで保育者として子ども・保育者・保護者とどのように関わるか具体的な動きや言葉工夫することができる。

科目、こどもの指導法「人間関係」は保育内容「人間関係」を指導するための技術や知識を学ぶ科目として位置付けた。ただし、両者が独立して授業内容を構成するのではなく、相互に関連したり、連動し合ったりしながら学んでいくことで、知識や理論と実践が結びついていくと言える。

実践の概要

チームビルディングのアクティビティの1つとして用いられる「ペーパータワー・チャレンジ」を体験した(図3)。また、「ペーパータワー・チャレンジ」を活かした幼児の遊びに繋がる活動として、製作活動「カメタワー・チャレンジ」を取り上げ(図3)、製作段階から実際に遊ぶ過程までを実践した。活動の展開は、以下1～9の通りであった。

1. **グループ分け** クジを引き、そこに描かれた動物ごとにチームを作った。ただし、チーム作りの最中は、一切声を出してはいけないことと、自分が引いたクジを他者に見せてはいけないことの2点をルールに定めた。
2. **材料の配布** 各チームに30枚のA4用紙を配布し、まだ紙には触らないように指示した。
3. **課題の提示** 「出来るだけ高いタワーを作る」ことをこの活動の課題として提示した。なお、用紙は折っても良いが、切ったり、貼り付けたり、紙以外の道具を一切使うことができないという制限を設けた。
4. **作戦タイム(5分間)** 作戦会議の時間を設け、グループ内でどのようにタワーを作るのかを話し合う時間とした。この時に触って良いのは一番上の用紙一枚だけとし、その一枚については、自由に折ったり、曲げたりしても構わないことを伝えた。
5. **ファースト・チャレンジ(5分間)** 用紙は折っても良いが、切ったり、貼り付けたり、紙以外の道具を一切使うことができないという制限のもと、「出来るだけ高いタワーを作る」ことを目標とした。
6. **計測** 組み立て終了後、全員がタワーから手を離し、全員で10秒数えた後、計測タイムに移行することとした。計測は、各グループが自分たちで計測し、値を報告するように伝えた。計測中に崩れた場合は「記録なし」とした。
7. **作戦タイム(5分間)** 1回目の結果を受けて、グループ内で「今よりも1cmでも高く積み上げるためにはどうすればよいか」を相談し、改善策を考えた。
8. **セカンド・チャレンジ(5分間)** 1回目と同様のルールで2回目のチャレンジを行った。
9. **カメタワー・チャレンジ** 実際に保育現場で実践できる保育活動として、以下の手順で「カメタワー・チャレンジ」の製作と実践を行った。学生に対して、授業者である筆者が見本を示しながら製作手順を説明し、1人1匹以上作成した。

製作手順

1. 色画用紙を好きな大きさや形に切り甲羅を作る。
2. 色画用紙で亀の頭、しっぽ、足を作り、甲羅の裏面にでんぷんのりで貼り付ける。

3. クレヨンやカラーマーカーで顔や甲羅に思い思いの模様を描く。
4. 甲羅の裏にペットボトルキャップを貼り付ける。このとき、事前にキャップの裏に両面テープを貼っておく。

遊び方

遊び方として、以下の2通りを提案し、今回の授業では【1】のルールで行った。

1. チームで協力し、積み上げた亀の数を競う
2. グループ内で一人ずつ順番にカメを乗せていき、タワーを崩した人を負けとする

なお、年齢によっては【1】の開始前に作戦会議を行うことも想定できるが、本時では作戦会議を行わずに取り掛かった。

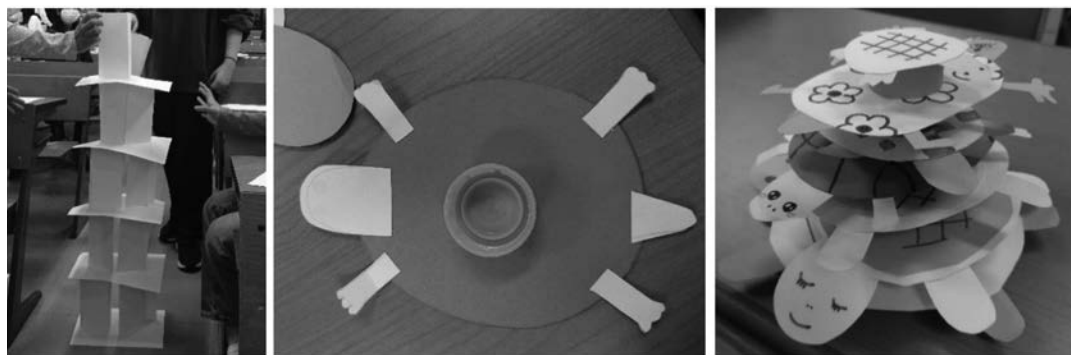


図3 ペーパータワー・チャレンジの様子／カメタワー・チャレンジの製作例

実践の成果と課題

保育内容「人間関係」のねらいや内容を踏まえて実施した、チームビルディング手法を用いた協同型授業の実践報告とその一考察を述べる。

まず、今回の授業実践にあたり重要視した点は、上述したように、「学生が実践に必要な技術とそれに裏付けされる知識とを関連させて身に付けられること」と「学生の視点に立った主体的・対話的な活動を生むこと」である。具体的には、グループになって友達同士で教え合ったり、話し合ったりする活動を伴い、さらにはグループ内で工夫や試行錯誤を繰り返しながら、目標の達成に向かって活動を進めることができる授業内容となるように計画した。

チームビルディングの手法自体が課題解決や対話を通したコミュニケーションなどの要素を含んでおり、充実感や達成感を共有することができるプログラムとなっている。その中で、今回実施したペーパータワー・チャレンジは、「できるだけ高いタワーを作る」という目標といくつかのルールは提示されるものの、決まった正解や明確なゴールが存在しないアクティビティである。そのため、学生たちは用紙の折り方や積み重ね方などタワーの作り方だけではなく、役割分担やどの程度まで

高くするかなど勝つための作戦を様々な視点から話し合い、各々のグループが異なる方策で目標達成に向けて取り組む姿が見られた。特に、計測までに崩れてしまうと記録なしとなるルールへの対策については、柱の作り方（四角柱や円柱）や各段に使う柱の数を工夫したり、崩落防止を優先して積み上げる高さを制限したりするなど、各チームの作戦が分かれた。こうした活動を通して、学生自身が「なかなか上手いかない」や「こうしたらどうだろう」といった試行錯誤を経験・体験したり、達成感や充実感を得たりすることができ、これらは経験知・体験知の視点からも非常に重要な学びになると言える。

また、こうした学生自身の様々な経験・体験は保育計画に繋げることができる。各領域のねらいや内容を踏まえて保育活動を計画するためには、各々の領域に対する知識的な理解だけではなく、自身の実体験を通して得た試行錯誤や工夫の経験、達成感や充実感に基づいて、子どもたちにどのような経験・体験が必要なのかを見出すことや、新たに考え出すことができる力も必要であると言える。

カメラワーの製作活動においては、顔、胴体、足4本、しっぽの4パーツについては原則として付けることとしたが、それぞれの大きさや形、色、ペットボトルギャップの位置などは自由とした。そのため、特にカメの大きさに関しては学生によって積み上げやすくするか、積み上げにくくするかで傾向が分かれた。これは、事前に行った「ペーパータワー・チャレンジ」の体験を踏まえ、ゲームを面白くするための工夫であると考えられる。また、作成したカメを積み上げるゲームにおいても、積み方やバランスの取り方などの面で工夫や試行錯誤し、チーム内で検討する様子が見られた。年齢は異なるものの、このように工夫したり試行錯誤したりしながらゲームを楽しむ姿は、同様の活動を子どもが行う際にも想定される。

ただし、こうした活動を行う場合、以下の点を考慮する必要がある。1つ目は、時間配分に余裕をもたせることである。子ども達一人ひとりがじっくりと活動に向き合い、様々なアイデアを考えたり、失敗や試行錯誤を経験したりしながら製作活動を行うことが重要である。そのため、上述したような過程を子どもたちが十分に経験できるだけの時間の設定が必要となる。2つ目は、一方的な説明に終始せず、子ども同士や子どもと保育者間の関わりが見られる活動にすることである。保育内容「人間関係」の中に、「一緒に活動する楽しさを味わう」とあるように、活動中における他者との関わりは重要である。友達との対話や保育者との相互の関りなどを通して、様々な感情や経験を共有したり体験したりする中で、豊かな感性が養われていくと考えられる。

なお、一点念頭に置いておかなければいけないことは、学生たちが幼児期に経験・体験した1998・1999（平成10・11年改訂保育）の保育内容であり、現行の保育内容とは少なからず相違点もある点である。例えば、本論に関連している部分に焦点を当てると、2008（平成20）年版の幼稚園教育要領及び保育所保育指針において、初めて「友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見だし、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ（保育所保育指針）」といった「協同性」に関わる文言が追加された。そして、この協同性については、現行の3法令の保育内容「人間関係」の中で重要な位置づけにあり、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の1つにもなっている。つまりは、こ

れから保育者を目指す学生達は、幼児期の経験・体験だけではなく、保育者養成校における授業や実習等の中で現行の保育内容について新たな知識を獲得したり、実際の経験・体験を通してより実践的な理解を深めたりすることが求められる。そして、こうした理論や知識と実践との結びつきが生まれるような授業を展開していくことも保育者養成校の教員としての責務であると考えられる。

参考文献

- 厚生労働省. (2017). 保育所保育指針. : フレーベル館.
- 文部科学省. (2017). 幼稚園教育要領. : フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省. (2017). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (平成29年告示). : フレーベル館.
- 太田裕子・高桑秀郎. (2010). 保育者養成課程における園外保育共同実践型授業の検討. 羽陽学園短期大学紀要, 8, 4, 33-40.
- 石動瑞代. (2018). 協同的な遊びを導く保育方法の検討. 富山短期大学紀要, 54, 95104.

引用文献

- 1) 岡田耕一. (2019). 保育原理: 子どもの保育の基本理論の理解. : 萌文書林.
- 2) 神田伸生・高橋貴志・天野珠路・請川滋大・片川智子・由田 新. (2019). 演習 保育内容総論: 保育の総合性を読み解く. : 萌文書林.
- 3) 開 仁志. (2018). 保育内容5領域と育みたい資質・能力の関係についての考察. 金沢星稜大学人間科学研究, 11 (2), 59-64.
- 4) 阿部和子・前原 寛・久富陽子・梅田優子. (2019). 改訂保育内容総論: 保育の構造と実践の探求. : 萌文書林.
- 5) 文部科学省. (2009). 全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会 ②協同して遊ぶことに関する指導の在り方. : 文部科学省.
- 6) 西坂小百合・岩立京子・松井智子. (2017). 幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係. 共立女子大学家政学部紀要, 63, 135-142.
- 7) OECD. (2015). Skills for Social Progress: the Power of Social and Emotional Skills. OECD Skills Studies. OECD Publishing. Paris.
(<https://nicspaull.files.wordpress.com/2017/03/oecd-2015-skills-for-social-progress-social-emotional-skills.pdf>)
(2021年7月20日15時40分).
- 8) 池迫浩子・宮本晃司. (2015). 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成: 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆. ベネッセ教育総合研究所.
- 9) 渡辺一弘. (2017). 保育内容「人間関係」の指導法についての検討: 他の保育内容の領域との違いを中心に. 会津大学短期大学部研究紀要, 74, 122-136.

- 10) 青山佳代. (2018). 保育者養成における保育内容指導法に関する一考察：「環境」と「人間関係」に注目して. *柳城こども学研究*, **1**, 31-49.
- 11) 小林美沙子. (2019). 領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討：領域及び保育内容の指導法に関する科目（人間関係）の授業実践から. *鳥根県立大学・鳥根県立大学短期大学部教職センター年報*, **1**, 32-41.
- 12) 顯谷智也子・福山 広・道下貴広・中村篤人・玉木隆幸・島岡三義. (2018). チームビルディング手法を組み入れた PBL 教育. *工学教育研究講演会講演論文集*, 126-127.
- 13) 野崎秀正. (2016). 協同型授業における仲間との学習経験が児童の学習観に及ぼす影響. *日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集*, **58**, 325.

